



津金澤聰廣 教授

つがねさわ としひろ
津金澤 聰廣教授略歴・主要業績

— 略 歴 —

学 歴

- 1948年4月～1951年3月 群馬県立沼田高等学校
 1953年4月～1957年3月 京都大学教育学部教育社会学コース（教育社会学専攻）
 1957年4月～1959年3月 京都大学大学院教育学研究科（教育方法学専攻）（中退）
 1999年2月 関西学院大学より 博士（社会学）学位取得

職 歴

- 1959年4月～1963年3月 株式会社毎日放送大阪本社企画調査部勤務
 1963年4月～1967年3月 関西学院大学社会学部専任助手
 1967年4月～1971年3月 関西学院大学社会学部専任講師
 1971年4月～1976年3月 関西学院大学社会学部助教授
 1976年4月～現在 関西学院大学社会学部教授
 1978年4月～現在 関西学院大学大学院社会学研究科博士課程前期課程指導教授
 1988年4月～1992年3月 関西学院大学図書館副館長を兼任
 1970年4月～1991年9月 京都大学教育学部非常勤講師（広報学担当）
 1981年10月～1982年3月 大阪大学人間科学部非常勤講師（コミュニケーション論特論）
 1987年4月～1987年9月 大阪大学人間科学部非常勤講師（コミュニケーション論特論）
 1990年4月～1991年3月 埼玉大学教養学部非常勤講師（コミュニケーション論特講）
 1991年4月～1992年3月 東京大学新聞研究所客員教授（非常勤）〈社会情報システム部門〉
 1992年4月～1993年3月 東京大学社会情報研究所客員教授（非常勤）〈情報・メディア部門〉
 1993年4月～1997年9月 京都大学教育学部非常勤講師（広報学担当）
 1964年4月～2000年3月 この間、以下の各大学でも非常勤講師を歴任（五十音順）（年度は省略）
 英知大学文学部、大阪学院大学国際学部、追手門学院大学文学部、関西
 大学社会学部、吉備国際大学国際社会学部、熊本大学法文学部、甲南大
 学文学部、甲南女子大学文学部、神戸大学文学部、神戸女学院大学文学
 部、親和女子大学文学部、同志社大学文学部、奈良女子大学文学部、阪
 南大学国際コミュニケーション学部、武庫川女子大学生活環境学部、桃
 山学院大学社会学部、龍谷大学文学部、流通科学大学商学部・情報学部

学会における活動

- 1963年4月～2000年3月 日本新聞学会会員、日本マス・コミュニケーション学会会員
 （1992年度より日本マス・コミュニケーション学会と改称）
 1965～73年度研究委員、1975～76年度理事、1977～78年度監事、1979～
 82年度理事、1985～88年度理事、1991～94年度（1992年度より）日本マ
 ス・コミュニケーション学会理事（会員）1997～99年度現在、理事（2000
 年度まで）
 1995年3月～1999年3月 日本広報学会理事（会員）
 1999年4月～現在 日本広報学会常任理事（会員）

2000年3月現在 日本社会教育学会会員、日本スポーツ社会学会会員、関西社会学会会員、
メディア史研究会会員
社団法人現代風俗研究会会員（1976年9月～1985年11月理事を歴任）

社会における主な活動

1975年4月～1978年3月 財団法人 山村育英会評議員
1978年4月～1995年3月 同 上 理事
1995年4月～現在 同 上 理事長
1993年4月～現在 財団法人 坂田記念ジャーナリズム振興財団選考委員会委員
1993年4月～現在 (株) スペースビジョン・ネットワーク (GAORA) 番組審議会委員長
1995年4月～現在 財団法人 阪急学園池田文庫評議員
1998年3月～1999年3月 郵政省・近畿地区デジタル問題懇談会委員

— 著 書 —

『テレビ番組論 —見る体験の社会心理史—』 読売テレビ放送(株) 1972年
(仲村祥一、井上俊と共著)
『権田保之助著作集第三巻』(編・解説) 文和書房 1975年
『放送論概説』(田宮武と共編著) ミネルヴァ書房 1975年
『マスコミを学ぶ人のために』(早川善治郎と共編著) 世界思想社 1978年
『近代日本の新聞広告と経営 —朝日新聞を中心に—』 朝日新聞社 1979年
(山本武利、有山輝雄と共著)
『マス・メディアの社会学 —情報と娯楽—』 世界思想社 1982年
『放送文化論』(田宮武と共編著) ミネルヴァ書房 1983年
『教育の環境と病理』(新堀通也と共編著) 第一法規出版 1984年
『日本の広告』(山本武利と共著) 日本経済新聞社 1986年
『テレビ放送を考える』(田宮武と共編著) ミネルヴァ書房 1990年
『大衆文化事典』(石川弘義らと共編) 弘文堂 1991年
『宝塚戦略 —小林一三の生活文化論—』 講談社現代新書 1991年
『女性とメディア』 (加藤春恵子と共編著) 世界思想社 1992年
『日本の広告— 人・時代・表現 —』(山本武利と共著) 世界思想社 1992年
『内閣情報部・情報宣伝研究資料』全8巻 (佐藤卓巳と共編・解説) 柏書房 1994年
『現代メディアを学ぶ人のために』(有山輝雄と共編著) 世界思想社 1995年
『近代日本のメディア・イベント』(編著) 同文館 1996年
『プレスアルト (復刻版)』全3巻, CD-ROM付 (嶋田厚と共編) 柏書房 1996年
『現代日本メディア史の研究』 ミネルヴァ書房 1998年
『戦時期日本のメディア・イベント』 (有山輝雄と共編著) 世界思想社 1998年
『震災の社会学—阪神・淡路大震災と民衆意識—』(黒田展之と共編著) 世界思想社 1999年
『テレビ放送への提言』(田宮武と共編著) ミネルヴァ書房 1999年

— 論文および研究ノート —

戦後日本における”大衆芸術・娯楽”研究の動向 『社会学部紀要』第9・10合併号 1964年4月
—付・主要関連文献目録— 関西学院大学社会学部
“小新聞”成立の社会的基盤 『社会学部紀要』第11号 1965年8月
—近代日本マス・コミュニケーション史研究ノート— 関西学院大学社会学部

- 児童漫画の教育社会学的考察
—その功罪論を中心に— 『青少年問題研究』第9号 1966年3月
大阪府青少年問題研究会
- 放送の公共性 —その歴史的検討— 『放送の公共性』 1966年
岩崎放送出版
- Postwar Trends of Studies in Japanese Popular Arts,
With a Selected Bibliography.** East-West Center, Hono-lulu, U.S.A. 1966年
- マス・メディア産業の構造 『マス・コミュニケーション入門』 1967年
—出版・映画— (分担執筆) 有斐閣
- 映像的認識についての覚え書 『社会学部紀要』第16号 1968年3月
関西学院大学社会学部
- 大衆娯楽と社会不安 『社会学部紀要』第17号 1968年11月
関西学院大学社会学部
- 現代日本における大衆娯楽と社会不安 『社会不安の社会心理学』 1968年
日本社会心理学会、勁草書房
- 物見遊山から旅行へ 『思想の科学事典』 1969年
勁草書房
- 現代日本の“大衆芸術・娯楽”の研究 『変動期の社会と教育』 1970年
黎明書房
- 「情報化社会」と放送ジャーナリズム 『新聞学評論』第19号 1970年5月
日本新聞学会
- 現代社会とマンガ 『言語生活』 1971年1月
筑摩書房
- マス・レジャー論覚え書 『社会学部紀要』第22号 1971年3月
関西学院大学社会学部
- ギャンブル・メディア論、わが国における娯楽研究小史 『現代娯楽の構造』 1973年
文和書房
- マス・メディアと「地方文化」 『社会学部紀要』第29号 1974年12月
関西学院大学社会学部
- 競馬ブームの社会心理・考 『高度工業化社会における疎外と逸脱に関する基礎研究(2)』 1976年
余暇開発センター
- 大衆余暇とマス・コミュニケーション 『現代の社会学』 1981年
ミネルヴァ書房
- 小林一三の余暇思想 —その娯楽・余暇事業観をめぐって— 『現代風俗'83』 1983年
現代風俗研究会
- ラジオのもたらした社会的波紋 『暮らしの美意識』 1984年
トメス出版
- 放送文化と自治体テレビ広報番組 『都市政策』第49号 1987年10月
神戸都市問題研究所
- 余暇行動とテレビCM視聴 『現代中国の消費革命』 1989年
日経広告研究所
- 初期普及段階における放送統制とラジオ論 『社会学部紀要』第63号 1991年3月
関西学院大学社会学部
- 宣伝・政治的与商業的 (黄升民による中国語訳) 『北京広播学院学報』 1992年3月
北京広播学院
- ラジオ・コミュニティメディア・週刊誌、など12項目 分担執筆 『新社会学辞典』 1993年
有斐閣
- わが国における放送の公共性に関する論議の歴史と展望 『放送学研究』43号 1993年3月
NHK放送文化研究所
- 雑誌『女性』と中山太陽堂およびプラトン社について (復刻版) 雑誌『女性』第48巻 1993年
—解説— 日本図書センター

情報化社会のイメージと情報機器の利用行動 (立木茂雄と共著)	『情報通信学会誌』11巻4号 情報通信学会	1994年3月
高度情報化と視聴覚メディアの大衆化	『情報通信学会誌』12巻5号 情報通信学会	1995年5月
阪神・淡路大震災と情報通信 (シンポジウムの企画・司会進行)	『情報通信学会誌』13巻2号 情報通信学会	1995年8月
阪神大震災における流言飛語とメディア	『放送学研究』46号 NHK放送文化研究所	1996年3月
Media Reporting and Rumor Following the Great Hansin Earthquake.	同上(英文版) No.32 NHK放送文化研究所	1996年5月
大正初期における宝塚の風景—箕面有馬電気軌道(株)の 沿線PR誌『山谷水態』での紹介記事を中心に—	『市史研究紀要たからづか』第14号 宝塚市教育委員会	1997年10月
戦後日本のメディア・イベント	『企業の発展と広報戦略』 日経BP企画	1998年12月
小林一三の大衆娯楽論	『現代風俗学研究』第5号 現代風俗研究会東京の会	1999年3月
小林一三の余暇思想	『余暇学研究』第2号 日本余暇学会	1999年3月
大正・昭和戦前期の総合芸術雑誌『歌劇』 (1918~1940年)の執筆者群と読者層	(復刻版)『歌劇』解説 雄松堂出版	1999年
メディア・イベントとしての軍歌・軍国歌謡	近代日本文化論10『戦争と軍隊』 岩波書店	1999年
百貨店のイベントと都市文化	『百貨店の文化史』 世界思想社	1999年
『プレスアルト』にみる戦時期デザイナーの研究(上)	『日経広告研究所報』第189号 日経広告研究所	2000年2月

— 学術・調査報告書 —

都市災害における対処行動についての実態調査	平成9年度文部省科学研究費報告書 文部省	1997年7月
「企業のフィランソロピーと広報活動」	研究会報告書(編著) 日本広報学会	1998年3月
阪神大震災以後の若年層における防災意識に関する 実態調査および仮設住宅から恒久住宅へ移転した被 災高齢者の生活実態調査	平成10年度文部省科学研究費報告書 文部省	1998年12月

— 訳 論 文 —

F. E.エメリイ「西部劇映画の心理学的効果 —テレビジョン心理学に関する作業仮説—」	Kyowa AD REVIEW, NO 3 協和広告株式会社	1961年6月
--	-----------------------------------	---------

— そ の 他 —

日本の新聞連載漫画史(1)	『思想の科学』 中央公論社	1960年6月
日本の新聞連載漫画史(2)	『思想の科学』 中央公論社	1960年9月
日の丸のはなし	『思想の科学』 思想の科学社	1964年1月
視聴者参加番組の魅力を探る	『YTVレポート』 読売テレビ放送	1965年2月
『マンガの主人公』 (作田啓一, 多田道太郎と共著)	至誠堂	1965年

民衆ラジオへの復権	『ラジオコマーシャル』 文化放送	1968年 5月
歌謡曲と青春	『ラジオコマーシャル』 文化放送	1968年12月
広告は子供の教育を阻害するか	『ブレーン』 誠文堂新光社	1968年12月
戦後新聞マンガの復活	『現代漫画 第5巻 月報』 筑摩書房	1969年 6月
大衆文化の中の土着性	『ブレーン』 誠文堂新光社	1970年 5月
作品解題（西部劇映画）	『少年漫画劇場 第8巻』 筑摩書房	1971年
作品解題（スポーツ漫画）	『少年漫画劇場 第9巻』 筑摩書房	1971年
作品解題（時代劇漫画）	『少年漫画劇場 第12巻』 筑摩書房	1971年
テレビ演芸にみる好みの変遷	『上方芸能』 上方芸能編集部	1974年 5月
主婦にとってのテレビ	『月刊るーぶ』 読売テレビ放送	1974年 8月
朝鮮民主主義人民共和国の放送・雑感	『放送文化』 日本放送協会	1975年 5月
「マスコミと子ども」観	『少年補導』238号 大阪少年補導協会	1976年 1月
テレビ以後の大衆芸能	『上方芸能』 上方芸能編集部	1976年 1月
私のラジオ論ノート	『ラジオコマーシャル』 文化放送	1976年12月
媒体としての盛り場復興論	『アドバタイジング』 電通	1977年 1月
夢と郷愁の世界・博覧会について	『阪急』 阪急電鉄	1977年 4月
戦時下における「広告浄化運動」	『広告月報』 朝日新聞社	1977年 5月
青春のイメージと母の原像	『アドバタイジング』 電通	1977年 7月
新聞のためのメディア環境論	『新聞研究』 日本新聞協会	1978年 3月
風俗関係取締令について	『世界思想』 世界思想社	1978年春号
盛り場の原型—千日前と新世界—	『アドバタイジング』 電通	1978年 4月
ゼミ合宿にみる学生風俗	『大学時報』 日本私立大学連盟	1979年 5月
出会いの場としてのテレビメディア	『月刊民放』 日本民間放送連盟	1979年 5月
日本人の余暇の過ごし方	『女性サロン』 大阪市立婦人会館	1979年 8月
朝のテレビ小説から街づくりへ	『月刊民放』 日本民間放送連盟	1979年 9月

テレビ世代の学生風俗	『教養の広場』 京都新聞社	1979年11月
ラジオ文化とディスクジョッキー	『上方芸能』 上方芸能編集部	1981年 8月
民放発足への視聴者の期待	『月刊民放』 日本民間放送連盟	1981年 9月
マス・メディアの社会学	『進路』 日本進路研究所	1982年 9月
マス・メディアと流行	『更生保護』 法務省保護局	1983年 3月
消費としての若者文化	『55』第130号 神戸新聞社	1983年10月
遊びを深く考えるために	『月刊・レクリエーション』 日本レクリエーション協会	1983年10月
遊びは文化をつくる	季刊『スコレー』36号 全国余暇行政研究協議会	1984年 2月
盛り場の社会心理	『月刊・レクリエーション』 日本レクリエーション協会	1984年12月
博覧会略々史	『本』 講談社	1984年12月
健康意識と余暇政策の課題	『国保ひょうご』 兵庫県国保団体連合会	1985年 1月
広聴活動の復権	『国保ひょうご』 兵庫県国保団体連合会	1985年 4月
風呂とタイルの話	『国保ひょうご』 兵庫県国保団体連合会	1985年 7月
健康意識と自然環境	『国保ひょうご』 兵庫県国保団体連合会	1985年11月
遊びとしての体育	『国保ひょうご』 兵庫県国保団体連合会	1986年 3月
ラジオ体操と夏休み	『国保ひょうご』 兵庫県国保団体連合会	1986年 7月
ホビーの生活設計	『ホビー&クラフト』 日本ホビー協会	1986年 5月
大衆文化とマスコミ	『現代のマスコミ入門』 青木書店	1986年
案内広告	『新聞をどう読むか』 講談社	1986年
『昭和マンガのヒーローたち』 (河合隼雄・作田啓一・多田道太郎・鶴見俊輔と共著)	講談社	1987年
ご飯のおいしさ有難さ	『国保ひょうご』 兵庫県国保団体連合会	1987年 1月
水と空気の話	『国保ひょうご』 兵庫県国保団体連合会	1987年 8月
「大阪21世紀計画」と関西大規模プロジェクトの動向	『JAAA レポート』312号 日本広告業協会	1987年11月
小林一三の田園都市論	『国保ひょうご』 兵庫県国保団体連合会	1988年 2月
食糧がなくなる日への怖れ	『国保ひょうご』 兵庫県国保団体連合会	1988年 7月

散歩のことなど	『国保ひょうご』 兵庫県国保団体連合会	1988年12月
余暇行政を考える視点	季刊『スコレー』55号 全国余暇行政研究協議会	1988年12月
イギリスの水問題広告	『国保ひょうご』 兵庫県国保団体連合会	1989年11月
イギリスのサーカス見物	『曲馬と曲芸』第26号 サーカス文化の会	1990年1月
余暇と文化	季刊『スコレー』60号 全国余暇行政研究協議会	1990年2月
歌声喫茶からカラオケへ	『国保ひょうご』 兵庫県国保団体連合会	1990年4月
家なき幼稚園のこと	『国保ひょうご』 兵庫県国保団体連合会	1991年7月
演歌のルーツを考える	『月刊カラオケ Fan』 コインジャーナル社	1991年10月
小林一三と宝塚 『91秋・阪神間ルネッサンス・シンポジウム記録』	武庫川女子大学生生活美学研究所	1992年
メディアとしてのサーカス	『木下サーカスの90年』 木下サーカス	1992年
小林一三	大阪学講座『なにわを築いた人々』 大阪市、(財)大阪都市協会	1992年
広告の風景	『国保ひょうご』 兵庫県国保団体連合会	1992年1月
阪神間モダニズム・宝塚	『月刊オール関西』 オール関西編集部	1992年8月
現風研のはがき報告	『国保ひょうご』 兵庫県国保団体連合会	1992年11月
阪急文化と小林一三	『月刊オール関西』 オール関西編集部	1992年12月
高度情報化と子供の遊び文化	季刊『TOMORROW』25号 あまがさき未来協会	1992年12月
ラジオ・テレビのクイズ番組史	季刊『is』 ポーラ文化研究所	1993年6月
「但馬・理想の都の祭典」の 交流人口とイベントの回流	『21世紀ひょうご』 ひょうご21世紀協会	1993年6月
大衆文化としてのカラオケ	『現代のエスプリ』312号 至文堂	1993年
窓のある都市を	『国保ひょうご』 兵庫県国保団体連合会	1993年7月
乾布摩擦とスキー	『国保ひょうご』 兵庫県国保団体連合会	1994年2月
西宮の街のイメージはどう変わってきたか (『第2回西宮市生活・産業情報セミナー講演記録集』)	西宮市情報センター	1994年
マス・メディア事業史研究の視点から	『大阪情報発信100年』 CDI	1994年
日本人の傲り	『国保ひょうご』 兵庫県国保団体連合会	1994年8月
メディア・イベント史中心の広報社会学	『マスコミ学がわかる』 朝日新聞社	1994年

戦前昭和の阪急電鉄ポスターについて	『館報池田文庫』6号 (財)阪急学園池田文庫	1994年10月
小林一三と宝塚歌劇	『上方芸能』119号 『上方芸能』編集部	1994年11月
大震災における流言蜚語	『週刊読書人』2月24日号 週刊読書人	1995年2月
阪神大震災と私	『国保ひょうご』 兵庫県国保団体連合会	1995年6月
宝塚文化と小林精神(阪急文化) 〈シンポジウム・宝塚80講演録〉	宝塚歌劇団	1995年
沿線に庶民の楽園を—郊外ユートピアの本質を読む—	『歴史街道』96年2月号 PHP研究所	1996年1月
水問題とマス・メディア	『国保ひょうご』 兵庫県国保団体連合会	1996年3月
ビール広告と日本人の暮らし	『広告』1996年3・4月 博報堂	
健康美について	『国保ひょうご』 兵庫県国保団体連合会	1997年5月
私の研究・広告の歴史的研究	『日経広告研究所報』第173号 日経広告研究所	1997年6月
『タカラヅカ・バルエボック』(名取千里と共編著)	神戸新聞総合出版センター	1997年
企業と催し物文化	大阪学講座『にぎわいの大阪史』 大阪市、(財)大阪都市協会	1997年
民話アニメの巨匠・岡本忠成	『伝説の大阪人』 大阪府立文化情報センター	1997年
小林一三と東京(「東京に残した足跡」)	『東京人』98年5月号 (財)東京都歴史文化財団	1998年5月
『山谷水態』と宝塚	『館報池田文庫』第13号 (財)阪急学園池田文庫	1998年10月
余暇行政について考える	季刊『スコレー』94号 全国余暇行政研究協議会	1998年10月
宝塚におけるにぎわいのまちづくり	『FUSION』第5号 宝塚まちづくり研究所	1999年3月
星野鐵男の環境浄化論	『健康』 月刊『健康』発行所	1999年3月
「家なき幼稚園」が時代を超えて現代の私たちに語りかけるもの	月刊『広報』第5号 日本広報協会	1999年4月
メディア・イベント	『メディア用語を学ぶ人のために』 世界思想社	1999年
小林一三による阪急沿線文化と関西学院	『関西学院フロンティア21』Vol. 5 関西学院	1999年6月
ラジオ	『生活学事典』 TBS プリタニカ	1999年
大阪府・池田室町ものがたり	『歴史街道』1999年8月号 PHP研究所	1999年8月
『阪神毎朝新聞』と小林一三	『館報池田文庫』第15号 (財)阪急学園池田文庫	1999年10月

「私の研究の出発点」

津金澤 聰 廣

私が学生時代に参加した京都大学教育学部教育社会学ゼミナールは複数教員による共同ゼミ方式であった。主任教授の重松俊明先生、永井道雄先生（助教授）、森口兼二先生（助教授）のご指導の下、大学院生から学部学生までいつも十名前後の小研究会という趣だった。この共同ゼミとは別に、永井道雄先生は、外書講読（D・リースマンの『孤独な群衆』やT・パーソンズ『行為の総合理論をめざして』など講読）と特講とを担当されたほかに、「思想の科学」研究会のサブ研究会として「小集団研究」グループを主宰されていた。当然のこととして私もこの研究グループにも参加させていただいたが、当時、京大人文科学研究所におられた鶴見俊輔先生を中心とする人文研分館での「思想の科学」研究会にも、永井先生のあとをついて例会をのぞかせていただいた。いずれも、諸先生方の厳しく熱心な論議をじかに拝聴できる楽しみと緊張感は格別の感銘があった。

「小集団研究」グループは、作田啓一先生や橋本真先生、それに当時文学部社会学の大学院生として塩原勉、吉田民人両氏も参加されていた。理論研究面ではこれらの諸先生方同士の議論を耳学問するばかりだったが、私たち学部学生班はいわばフィールド・ワークを担当し、たとえば、都市銀行の労働組合員との共同実態調査とか、当時労働争議中だった「任天堂」の第一組合に協力して、なぜ第二組合ができたのかの聴き取り調査に参加した。後者の調査結果は、同級生の一人が卒業論文としてまとめて提出したことを憶えている。

当時やはり京大人文研におられた加藤秀俊先生には、教育学部ではじめて開講された「広報学」講義でコミュニケーション論の手ほどきを受けた。加藤先生が京大を去られたあと、私がその後「広報学」を受け継ぐことになるとは夢にも思わなかった。（結局、1970年から当時の姫岡勤先生（教授）の推薦で「広報学」を非常勤講師として担当、その後1997年まで合計25年間担当した。）加藤秀俊先生も「思想の科学」研究会のサブ研究会として「コミュニケーション研究」グループを別個に組織され、私も参加した。この研究グループのフィールド・ワークで最も印象が強いのは、「日本人はアメリカ映画をどう受けとめているか」についての面接調査である。たしかパラマウント映画の『黄金の腕』（フランク・シナトラとキム・ノバックの共演だったと記憶している）を観てもらったあと、多様な年齢、性別、職業別の京都市民に、細かな場面の印象まで根ほり葉ほりおしゃべりしながら聞き出す作業であった。今でいうデプス・インタビューに似た根気のいる調査で、あらかじめラポールをつけるのには時間と工夫を要した。

この研究会ではこの外、当時急速な伸びを見せた「週刊誌」に関する総合的研究にも力を注ぎ、その内容分析の調査結果は、私の一学年下の友人たちの共同研究になる卒業論文として結実している。これはその直後、加藤先生がまえがきを、永井先生があとがきを書かれ、三一新書（155）『週刊誌—その新しい知識形態』（1958年）として出版された。

これら各研究会での活動のほか、私は学部二回生から四回生まで、朝日新聞京都支局世論調査アルバイトをほぼレギュラーで勤めた。京都のせまい路地まで覚え、地理に詳しくなったのはこのバイトのおかげである。ことに、選挙速報アルバイトは、新聞記者になっ

た気分です。そうした職業にあこがれる一因ともなった。また、京都ならではのアルバイト体験の一例として、映画ロケでのエキストラ体験と、春秋の大掃除アルバイトが思い出される。ロケでの「その他大勢」出演では『女の一生』や『夜明け前』をはじめとして数回友人と共に出かけ、今なお貴重な機会だったと思う。また、田舎の実家にいる時には逃げ回っていた大掃除もアルバイトとなると別である。ヨソ者に冷たい京都の人の家の中をみられる特別の機会とも考えて積極的に働いた経験がある。学生時代にはアルバイトといえども、貴重なフィールド・ワークの機会になると思う。

その後、大学院修士二回生の春、永井先生が東京工大へ移られたこともあり、秋から入社試験をパスして内定していた毎日放送大阪本社の企画調査部の仕事を手伝った。1959年四月から正式入社となり、大学院を中退、満四年間、企画調査関係の業務を担当。当時はOTVが毎日テレビと朝日テレビに分離してスタートしたばかりで、ラジオもテレビも大いそがしで、日曜休日もほとんどなく、連日終電で帰途につく有様だった。とりわけ、営業サービスで始めたスポンサー個別のマーケティング・リサーチを大阪地区一万人対象の面接調査として毎年二回程度実質的に二人の社員で切り盛りして実施した。この調査は関西における有力大学の学生百名を連日訓練して調査員として採用、関学からも多くの学生をアルバイトとして採用している。とにかく、顧客の調査目的・希望項目の聴取から具体的な質問紙の作成、調査実施、集計、分析、報告書作成、調査結果報告会をほぼ二人だけで連日連夜懸命に取り組んだ。途中、MBS労働組合の執行委員（情宣部長）も兼ねたので多忙に輪をかけて、帰るとぐったりし、健康に不安を感じてきた。そんな時、もう一度大学院に復学するため、恩師を訪ねたところ、関学と関大でマス・コミュニケーション関係の助手を募集しているので関学に応募してみてもどうかとすすめられた。当時、関大社会学部でコミュニケーション論を担当されていた吉田民人さんに応募論文の原稿を見ていただいた。幸運にも関学社会学部専任助手に採用されたのは1963年四月のことであった。月給は毎日放送の半分になったが、とにかく時間が自由に使えるので、大学はまさに「天国」ではないかと一瞬思ったほどだ。（その四、五年後に勃発した大学紛争により「東の東大、西の関学」といわれた激しい“関学闘争”の「地獄」を経験することになるのだが。）

関学に京都から通勤するようになってはじめて阪急電鉄を利用することになり、関学が上ヶ原にあるのも小林一三のおかげと知った。関学に勤め始めたことが、私の小林一三や阪神間文化研究の直接的なきっかけとなっている。

（『関西学院大学社会学部30年史』1995年、所収）

津金澤聰廣教授記念号によせて

社会学部長 高坂健次

津金澤先生は京都大学ならびに同大学院で教育社会学を修められましたが、学生・院生時代から関心は教育社会学の枠をはるかに超えていたように思われます。若き永井道雄氏を師とし、鶴見俊輔氏らによる「思想の科学研究会」や加藤秀俊を中心とするコミュニケーション研究会（のち、京大^{おお}大衆映画研究会）らの影響のもとに、コミュニケーション、家族、民衆娯楽、大衆文化、生活文化などに関心をもたれました。このときの関心は通奏低音となってその後の研究生活に流れ続けたように思われます。

先生は1963年に本学部専任助手として就任されるまでの4年間ほど、毎日放送大阪本社で企画調査をお仕事に携われました。大学院時代には、アメリカ映画の影響に関する調査や、そのころ流通しはじめた「週刊誌」の歴史と現状についての調査を経験されています。当時先端的であったSD法なども試みられる一方で、どちらかと言えば量的ではなく質的な調査方法に傾倒されていったようです。

日本のジャーナリズムに関しては、それまで大新聞（＝政治・言論紙）ばかりが目ざされてきたのに抗して、先生は小新聞（＝娯楽・雑報紙）にこそ源流があるのではないかと、この仮説のもとに、「小新聞」の研究に着手されました。これが先生のなかでのマス・コミュニケーション史あるいはメディア史のはしりとなりました。

関学^{おほ}に就職されてから、はじめて阪急電車に乗るという経験もされました。通勤のときに見た沿線風景が新鮮で、電車もモダンの香りがありました。このときの経験が先生をして、小林一三、阪急電車、宝塚戦略、阪神間モダニズムの研究へと駆り立てたのです。

先生のお仕事は、表面的にみると実に多岐にわたっております。漫画から西部劇、盛り場から最近では災害と情報など。また著作リストなど拝見しておりますと「ゼミ合宿にみる学生風俗」というものもありまして、何でも研究の素材になってしまいそうです。表面的な多様性のなかの学問的特徴を一言で言えば、serendipity（掘り出し型）とマートンによって名づけられた方法にあります。つまり、各種のメディアをめぐる未公開・未整理の貴重な史資料やデータを「掘り起こす」ことによって、社会心理史、社会史、文明史の観点からまとめ、さらに理論構築をめざすという方法です。その妙味は、「私のメディア史研究と小林一三、権田保之助、そして星野鐵男」と題する最終講義でもいかに発揮されました。

これまでお仕事の一部は『現代日本メディア史の研究』と題する本にまとめられ、そのお仕事に対しまして、1999年学位が授与されたのであります。業績は多く、共編著の形をとっている著書、つまり本のかたちをとっているものだけで、なんと22冊もございます。論文にいたっては数えきれないくらいです。

社会学部内におきましては、「新聞資料室」の充実にご尽力されましたし、学部国際交流委員長として、中国人民大学との交流に貢献なさいました。また、大学レベルでは図書館副館長として、これまた学術情報の整備拡充につとめられました。各大学への出講、ご

講演も数限りなくございますし、日本マス・コミュニケーション学会、日本広報学会など理事を務められ、学会にも貢献されました。

先生はどこにも行かれなくても、ご自分の目と足とで意欲的に情報を収集してこられます。イギリスに行けば、ロンドンからギルフォードまで列車で行けば30分くらいのところをわざとバスに乗ってあちこちの街中を見てこられますし、中国へ行けば行ったでカラオケめぐりをされたりしておられます。すべて研究心からです。私は、こうした見聞にもとづいて先生が比較的軽くお書きになるエッセイ風のレポートが大好きです。その都度、「今度こんなもの書いたので読んで欲しい」といってそのコピーを下さるのですが、私はその愛読者の一人であります。こうした好奇心に支えられた「考現学」は、相当の気力・体力を要するのではないかと思います。先生、これからもお元気でそうした「考現学」をお続けください。そして、またその原稿を読ませていただきたいと思います。

星野鐵男の生活文化論*

津 金 澤 聰 廣**

1. 「環境」研究の先覚者・星野鐵男

今でこそ「環境」論、「環境問題」ないし「環境社会学」などが国内問題としても国際的にも人びとの大きな関心事となっており、「広報社会学」の分野でも「環境広告」および「環境広報」のあり方やその可能性追求が今日の重要テーマとして浮上している。

星野鐵男（1890～1931年）は、すでに80年前から広く人間の健康をめぐる環境問題にいち早く「環境衛生学」ないし「社会衛生学」専攻の立場から、その生涯を通して取り組んだ先覚者の一人である。その概要について後に紹介し、検討するのが本稿の目的だが、その一例をあげれば、星野は「保健衛生」の根本問題として、まず、われわれを取り巻く日常生活環境の「浄化」が必要であり、そのためには何よりも都市の「田園化」が緊急の重大課題であることを提唱しており、それが今日のわれわれの生活文化にとってどれほど切実な問題であるかを絶えず説きつづけ、且つ自ら実践しつづけた点で改めて注目されよう。

星野鐵男の経歴について

星野鐵男の経歴については急逝後、一周年記念に発行された村上賢三・木村與一編『星野鐵男』（衛生文化思想普及会、1933年）に所収の南原繁「履歴（一）出生より金澤まで」並びに村上賢三「同（二）金澤来住より埋骨まで」等に詳しく記載されている。ここでは、本稿を進める上で必要な最小限の略歴のみをたどっておきたい。（以下、多くの引用文の表現は現代表記に改めた。）

星野鐵男は、1890（明治23）年2月10日、群馬県利根郡南村大字戸鹿野（現・沼田市）にて、銀治・はまの三男として生まれた。星野家は、当地の旧家で当時最初のキリスト教の家庭であり、「君生まれながらにして信仰の雰囲気の中にあり、早くより日曜学校にも通う」という生活環境の中で育った。¹⁾やがて地元の升形尋常高等小学校（9歳の時慈母を失う）から、1903（明治36）年群馬県立前橋中学利根分校（旧制沼田中学校）に入学（15歳の時、第二の母とも死別）するが、その間の鐵男について南原繁は「爾来、君は姉の機織の手伝いをなし、或は編み物の稽古をなしたることもあり。又よく一人の愛妹の世話をなしたりという。後年、家政、育児の事に関心をもち、君が家庭の不幸に際会して、母なき三人の愛児のために自ら是等のことに当たりたるもさこそと思

*キーワード：住環境、星野鐵男、生活文化

**関西学院大学社会学部教授

- 1) 村上賢三・木村與一編『星野鐵男』（衛生文化思想普及会、1933年）のうち、経歴については、南原繁、村上賢三の記述から引用・参照した。なお、星野鐵男の生涯については、上記の『星野鐵男』のほか、星野達雄の著作に多くを教えられたことを明記し、心から感謝申し上げたい。たとえば、

星野達雄『星野光多と群馬のキリスト教』星野光多と群馬のキリスト教刊行会（発売所・キリスト教新聞社）1987年。

星野達雄『からし種の一粒から——星野るいとその一族』ドメス出版、1994年。

星野達雄「内村鑑三を師とする星野鐵男」『内村鑑三研究』第31号、1995年11月。

（とりわけ、星野鐵男と内村鑑三との師弟の深い交わりについては、この論文から多くのものを教えられた。）

および、沼田教会創立百周年記念事業百年史編集委員会編『沼田教会百年の歩み』日本基督教団沼田教会、1989年、参照。

なお、本稿の引用文等の表記は例外を除いて多くは、ほぼ現代表記、当用漢字に改めた。

い合せらる」と書いた。

旧制沼田中学校卒業後、19歳で利根郡真庭小学校の代用教員として奉職、その間童話に童謡に、児童教育に興味を覚える。1909（明治42）年旧制第二高等学校（医科）に入学、キリスト教主義の寄宿舎「忠愛之友倶楽部」に起居することになったが、この時代に内村鑑三の『聖書之研究』誌に接し、魅せられ、その後内村と出会うことになる。1912（大正元）年、東京帝国大学医科大学に入学し、医学を学ぶかわら、長く待望していた東京郊外柏木における内村鑑三の聖書講筵に列することを許され、門下生となった。そして、その門下生のうち、南原繁、坂田祐、鈴木錠之助、松本実三、高谷道男、石田三次ら七名で（その後さらに、植木良佐、小出義彦、高田運吉、松田寿比古、松田亨爾、土屋禎らも参加）「白雨会」を組織した。²⁾「白雨会」とは旧約聖書詩篇第65編第10節に基づく「神の恩恵なる白雨」にちなんで命名されたものとのことで、星野と会員とは生涯にわたって親密な交わりを保ち、とりわけ、南原繁とは、鐵男の愛妹・百合子（きく子）が南原の最初の妻（百合子は1925年に病没）となるほどのまさに兄弟としての深い交わりを保った。³⁾

1917（大正6）年12月東京帝国大学を卒業、「当時ほとんど顧みられなかった衛生学教室に入り」⁴⁾、間もなく、内務省保健衛生調査会による、

高野岩三郎を中心とする東京市京橋区月島における労働者についての初の総合的な生活実態調査（内務省衛生局による略称「月島調査」1918～1920年）に内務省囑託として参加した。星野は衛生学者の立場から一時はそこに小家屋を借り、泊りこんで「月島における労働者の衛生状態」について、まさに丹念な実地調査を担当、報告書（1921年刊）も分担執筆した。これが彼の学問的調査研究のもう一つの出発点ともなっている。

「月島調査」以降の研究テーマ

その間、1920（大正9）年に大石みその（京都の大石和太郎長女）と31歳の時結婚、司式は内村鑑三によって行われた。⁵⁾翌1921年東京帝国大学医学部助手に任ぜられ、1922（大正11）年には新設の金沢医科大学教授に内定したあと、1922年春より1924（大正13）年5月まで文部省から留学を命じられ、2年の間欧米諸国で在外研究に従事した。白雨会の友人、植木良佐はこの留学を「人は皆教授の肩書きで行き度がるのに、彼は平気で東大助手として出かけた」と書いている。⁶⁾

1924年5月帰国と同時に任地の金沢医科大学（現・金沢大学医学部）の初代衛生学講座教授となり赴任、以降、大学での教育・研究のみならず、北陸地方を中心に各地で衛生文化思想の普及、旺盛な講演、執筆活動を展開し、人間の健康の問題

2) 加藤節『南原繁——近代日本の知識人』（岩波新書、1997年、38～39ページ）によれば、内村鑑三門下には、天野貞祐、小山内薫、志賀直哉らによる「教会会」というグループのほか、前田多門、鶴見祐輔、森戸辰男、高木八尺、三谷隆正、田中耕太郎、矢内原忠雄ら多くの俊秀が「柏会」というグループをつくっていた。「白雨会」は、これらよりややおくれで組織されたグループである。

また、同書（39ページ）によれば、南原が「白雨会」の交わりを大切に背景には、人間の共同体的結合そのものを評価する彼の態度があり、逆に「白雨会」のメンバーとの交友が南原の共同体的価値観を強めた面もあった、と次のように書いている。

「無教会主義をえらんだ南原において、『白雨会』の交わりは、信仰について語り合うことで、自己の信仰を確認し、ふかめ、つよめていくためのほとんど唯一の機会となった。」

3) 星野鐵男と「白雨会」とりわけ、南原繁との深い交わりについては、星野達雄「内村鑑三を師とする星野鐵男」（前掲論文）に『白雨会誌』などを引用して詳しくふれられている。また、南原繁と星野百合子（きく子）との結婚に至る経緯も詳しく記されており、『白雨会誌』にも「大正5年11月20日（月）午後三時、今井館に於て、南原繁君、星野百合子嬢の結婚式挙行せらる。内村先生司式せられ、坂田夫婦媒酌たり。」と書かれているとのことである。

さらに、星野鐵男と「白雨会」については、坂田祐「星野君と白雨会」、高谷道男「白雨会と星野君」、植木良佐「星野鐵男君を憶ふ」（前掲書）『星野鐵男』所収、に詳しい。

4) 植木良佐「星野鐵男君を憶ふ」前掲書、127ページ。

5) 内村鑑三は『日記』に次のように書いた。「10月28日（木）晴、少しずつ快し、前約に従い医学士星野鐵男対大石ミソノの結婚式を司った。この任に当り得るだけ健康が回復し居りしことを感謝する。実に美はしき式であった。簡単で、誠実で、神聖で、一同歓喜に充たされた。」山本泰次郎編『内村鑑三日記書簡全集』第1巻、教文館、1964年、314ページ。

6) 植木良佐「前掲論文」128ページ。

を主に住生活の改善や環境問題についての啓蒙、実践活動を通して積極的に推進している。

「彼は小さい論文や報告を作ることに余り頓着しなかった。彼の着眼は今少し高く、従来研究室に閉じ込められて窒息しかかっていたわが国の衛生学を、広い自由の天地に開放し、医学者間にまで医学の小分科としか見なされなかったものを、医学そのものと対立すべき本来の位置に戻し、またこれを一部専門家の手から開放して、一般家庭の日常生活に織り込もうとした。それが彼の目的であった。」

「見るべし。彼は独り学内にとどまらず、出でては北陸の天地を嵐の如く馳けめぐって、靈魂と肉体との聖潔を呼号した。」

以上は、同じ医学者でもあった友人・植木良佐の星野評であるが、次のようにも書いている。

「外に対しても彼の活動は益々盛になった。公衆衛生施設、講演、伝道、キリスト教青年会の指導、衛生文化叢書および同リーフレットの発行等々、三面六臂でも及ぶまじい活動が続けられた。」⁷⁾

あるいは、衛生学的見地から自らモデルハウスを設計、建築し、金沢の自宅の庭先には「青年の家」を作り、学生や研究生らに開放したという。学内では、超多忙の中を学生監、学生部長をも務めるかたわら、キリスト教の信仰と伝道、家庭ではわが子三人の「養教育」を実践するなど、すべてに全身全霊を打ちこみ取り組んだが、惜しくも1931（昭和6）年12月わずか41歳という若さで病

のために急逝された。1927（昭和2）年9月、みその夫人を失って4年後のことであり、あとには、幼い愛児三人が遺された。⁸⁾

星野鐵男のその短い生涯に凝縮されている知られざるさまざまな先駆的業績についてはこれまでとすると、星野を主に「性教育」のパイオニアとしての研究側面のみが注目され、クローズアップされているが、⁹⁾彼の輝かしい非凡な業績はそれにとどまるものではない。むしろ、星野鐵男の全体としての研究業績は、植木良佐もすでに指摘しているように、衛生学を「広い自由の天地に開放し」、「これを一部専門家の手から開放して、一般家庭の日常生活に織り込もうと」実践活動にまで推し進めた点にあり、いわば、社会衛生学、環境衛生学の立場から「郊外ユートピア」の思想と実践に深く関わった先覚者としても忘れることはできない。すなわち、人々の生活文化や環境と健康とに関わるすべての問題が、星野にとっての重要な関心事であり、研究テーマであったのだ。

その文脈で、本稿では、むしろこれまでふれられることの少なかった彼独自の住生活論や健康と環境についての理論的・実践的側面について限られた範囲ではあるが、紹介と検討を試みたい。もとより、星野鐵男の仕事については、彼のキリスト教の信仰と伝道とが分かちがたく結び合っており、それらと切り離して論ずることは当を得ないことを承知の上で（その点は筆者の任を越えるので）あえて以下本稿を進めたいと思う。¹⁰⁾

7) 同上、129ページ。

8) 星野鐵男の師・内村鑑三は1930（昭和5）年3月28日に召天されたが（享年70歳）、星野はその翌年1月4ヶ月後に師のあとを追うように41才の若さで召天された。

9) たとえば、石川弘義「星野鐵男の『性教育論』」および、井上忠司「星野鐵男と大正文化」共に、星野命編『異文化間関係学の現在——旅・異文化・人生』金子書房、1992年所収。

なお、星野鐵男をその「性教育」論のみでなく、彼の研究成果を全体として論じている先行研究には、たとえば、

川合隆男「愛児のために何を為すか・星野鐵男」生活研究同人会編『近代日本の生活研究——庶民生活を刻みとめた人々』光生館、1982年、所収。および、星野の業績をその社会衛生学史の上で位置づけた研究論文に、

瀧澤利行「近代日本における社会衛生学の展開とその特質」『日本医史学雑誌』第40巻第2号、1994年6月、日本医史学会、がある。この瀧澤論文では「社会衛生学における『自治』理念の実践化——星野鐵男の例——」として、近代日本における社会衛生思想史並びに社会衛生学史上での星野鐵男の業績を詳細に考察しており、多くを教えられた。この貴重な論文の所在をご教示下さった花園大学大学院教授・大國美智子先生にこの場を借りて深く感謝したい。

10) 星野鐵男の信仰生活については、前掲注1)の村上賢三・木村與一編『星野鐵男』並びに、星野達雄「内村鑑三を師とする星野鐵男」等を参照されたい。とりわけ、星野達雄の諸著作はこの問題をすでに深く論究しており、多くのことを教えられた。

2. 星野鐵男との出会い—権田保之助、小林一三そして旧制沼田中学—

権田保之助の民衆娯楽研究

衛生学者である星野鐵男と広報社会学やメディア史専攻の私とがどう結びつくのか、その幾重にも重なる出会いについて、まずふれておきたい。私は京都大学教育学部在学中から、重松俊明（主任教授）、永井道雄（助教授）、森口兼二（助教授）、加藤秀俊（京大人文学研究所所員）の諸先生からご指導をいただき、教育社会学や社会教育学の基礎を学んだ。とりわけ、先生方からのご指導で強く私の心に印象づけられたことのひとつは、現代社会と教育との問題を考えてゆく上で、教育の社会的機能を学校教育の領域に限定してしまうのは狭すぎる、もっと広く重層的に社会教育や家庭教育との相関でとらえてゆくべきだという指摘であった。社会教育のなかでも、とりわけマス・メディアによるマス・コミュニケーションがもたらす問題は教育を考えるとときに、特に重要だという点に強い関心をもったのである。当時、アメリカ合衆国でのマス・コミュニケーション研究は、コミュニケーションの二段の流れ論やその伝達過程における準拠集団の媒介変数としての小集団への注目があがり、その関連で、社会教育の一環としてのマス・メディア研究を進める上ではまず、小集団研究、とりわけ家族や友人集団等の研究が必須であることを教えられた。ちょうど永井ゼミでは小集団研究がテーマだったこともあり、私が学部の卒業論文に、重松・永井両先生のご指導で近代婚姻家族の問題を取り上げたのも以上のような経緯による。その直後の1957年の『思想』2月号に加藤秀俊「ある家族のコミュニケーション生活」が発表されたのも、私が家族研究とコミュニケーションとの関連に着目する大きな学問的導

きとなった。大学院教育学研究科（教育方法学専攻）では、主に、教育社会学、社会教育学の見地から大衆文化としてのマス・メディアの問題に焦点を絞り、学部時代から関心の強かった映画史研究から出発した。当時、学部・大学院共通講義で、加藤秀俊先生が「広報学」の名でコミュニケーション論を担当されており、先生の指導による日米映画についての「解き口」実態調査などコミュニケーション研究会に私も参加することで、映画の現状と歴史について自然と研究関心が高まった。その学習過程で映画（活動写真）や民衆娯楽研究で先駆的な業績を数多く発表していた権田保之助の研究の存在を知ったのである。

その後、大学院を中退して（株）毎日放送に入社、社員としてラジオ・テレビ関係の各種実態調査やCMや商品についてのマーケティング・リサーチに連日従事することになるが、その間も権田保之助による映画や民衆娯楽などのマス・メディア調査文献は直接、間接に仕事の参考になった。1963年に幸い関西学院大学社会学部助手に採用され、翌年最初にまとめて発表した小論が「戦後日本における“大衆芸術・娯楽”研究の動向——付・主要関連文献目録」である。そのなかでもその前史のひとつとして権田保之助について改めて学習する機会となった。その研究業績をたどるうちに、権田も参加した高野岩三郎らによる「月島調査」の存在を知ることになり、その共同研究のメンバーのひとり星野鐵男という研究者にも強く印象づけられた。「月島調査」の詳しい内容を直接眼にしたのは、その復刻版が「生活古典叢書」の第6巻として光生館から刊行された1970年3月以降のことになるが、その間私自身、権田保之助研究はずっと持続していた。¹¹⁾

この「月島調査」は実際に種々の企業サイドの社会調査に従事してきた者の目からは、まさに総

11) 研究対象として権田保之助に最初に触れた論稿は、「戦後日本における“大衆芸術・娯楽”研究の動向——付・主要関連文献目録——」『関西学院大学社会学部紀要』第9・10合併号、1964年4月、であり、その後「現代日本の“大衆芸術・娯楽”の研究」重松俊明編『変動期の社会と教育』黎明書房、1970年、および、「わが国における娯楽研究小史」仲村祥一編『現代娯楽の構造』文和書房、1973年、とつづき、1975年には、『権田保之助著作集』第三巻を津金澤が編・解説を担当し、文和書房から出版した。（この著作集は、第一巻を仲村祥一、第二巻を井上俊、第四巻を田村紀雄が編・解説をそれぞれ担当した。）

その後も、日本人と娯楽研究会に参加し、＜シンポジウム＞「権田保之助の全体像とその現代的意義」（『権田保之助研究』創刊号、1982年秋）、および＜座談会＞「娯楽を見る目——娯楽研究の視点と権田保之助の位置」（『権田保之助研究』第4巻、1986年冬）にも出席し、発言している。

合的な本格的、画期的な社会調査であり、その調査を指導した高野岩三郎や権田保之助や星野鐵男の業績に対してはいつそう強い関心と興味をもった。とりわけ、1968年に出版された大島清『高野岩三郎伝』（岩波書店）に接し、「月島調査」の社会思想史にとっての意義についても学ぶことができた。

小林一三と星野鐵男の「郊外ユートピア」

他方、私と星野鐵男との出会いは、小林一三研究とも深く関わっている。私のメディア史研究の関心は、学部学生時代からの娯楽ジャーナリズムへの興味に始まり、そこに重点を置いていた。新聞ジャーナリズムの源流をたどるとその本流は、実際は“小新聞”と呼ばれた娯楽・雑報紙の系譜にあり、それまでなおざりにされてきた“小新聞”研究をはじめ映画や漫画やラジオなど娯楽・雑報メディアの研究が、今こそ必要ではないかと気づいたからであった。その事例研究のひとつとして、大阪における『大阪毎日新聞』と“小新聞”として創刊された『大阪朝日新聞』との競争関係史などを調べてゆくうちに、とりわけ『大阪毎日』が『大阪朝日』に発行部数の面で追いつき追い越せとばかりに、まさに多種多様な新聞社事業という名のメディア・イベントを企画、実行し、実績をあげていることに注目した。¹²⁾

たとえば、『大毎』はその事業活動の一環として小林一三の阪急電車とさまざまな沿線行事や事業を共催し、両者の乗客・読者増のタイアップ効果をあげている。そのひとつ、大毎慈善団（その後の社会事業団）と宝塚少女歌劇との10年間にわたる大毎慈善歌劇会の成功が、その後の宝塚歌劇の発展の重要な契機になったことは、今ではよく知られている。今日の甲子園野球の原点も元はといえば、阪急電車の沿線開発事業からはじまっている。小林一三は、その沿線開発のモデルを20世紀初頭に胎動した欧米での田園都市運動に刺激を受けて構想した形跡がある。結果的にそれは、い

わゆる田園都市運動とはかけ離れた、大都市近郊のベッドタウン開発にとどまったきらいはあるが、その沿線開発初期には、明らかに日本における「郊外ユートピア」への理想が掲げられた。そして部分的にせよ、阪急沿線池田室町等の新しい街づくりの成功が注目され、それはその後の東京における田園調布の誕生へと引きつがれていった。これらの過程についてはすでに論究を試みたが、¹³⁾私の注目をひいたのは、小林一三も憧れていた田園都市の現地に、星野鐵男は在外研究中に実際に訪れ、詳細にその実態を調査報告している点であった。田園都市の問題に関心をもった日本の知識人や都市計画の専門家達は少なくないが、その当時現地踏査をした研究者はきわめて少数であり、そのひとりが星野鐵男であった。この田園都市、花園都市構想の推進者、実践者として、小林一三と星野鐵男とは直接交流はなかったものの「郊外ユートピア」の理想を共有する点でその延長線上にあると見ることもできよう。

さらに、私と星野鐵男との出会いは、星野が同じ郷里の先覚者であり、旧制群馬県立沼田中学校の大先輩に当たるという関係にもある（私自身は旧制沼田中学校の最後から二番目の入学で、卒業は新制高校）。しかも、私の家の隣家であり幼なじみでもある年長の友人・角田勤医博の御母堂の叔父様に当たるのが星野鐵男そのひとなのである。角田勤医博との親しい関係のお陰で、星野鐵男に関する貴重な資料・文献をご教示いただき、また入手することができ、その文献資料の未入手の部分は、その後、石川県立図書館や金沢大学医学部図書室等に出かけ、そのご協力でも補うことができた。今、私はこうした重なりあった不思議なご縁で星野鐵男と出会うことができたことを心から感謝している。

3. 星野鐵男と「月島調査」

「月島調査」とは

12) この『大毎』の戦前におけるメディア・イベント史については、津金澤聰廣「大阪毎日新聞社の『事業活動』と地域生活・文化」津金澤編著『近代日本のメディア・イベント』同文館、1996年、ですすでに論及を試みた。

13) たとえば、津金澤聰廣『宝塚戦略——小林一三の生活文化論』講談社、1991年、および津金澤「沿線に庶民の楽園を——郊外ユートピアの本質を読む」『歴史街道』1996年2月号、PHP 研究所、津金澤「小林一三と東京（東京に残した足跡）」『東京人』1998年5月号、(財)東京都歴史文化財団、あるいは、津金澤「小林一三による阪急沿線文化と関西学院」『関西学院フロンティア21』第5号、1999年、関西学院、等参照。

いわゆる「月島調査」(1918~20年)の結果をまとめた報告書は、『東京市京橋区月島における実地調査報告』として、1921(大正10)年5月に内務省衛生局より出版された。調査は、高野岩三郎の指導のもとに進められ、実地調査を担当し、報告書の執筆にあたったのは、総説を高野岩三郎、「月島と其の労働者生活」を権田保之助、「月島に於ける労働者の衛生状態」を星野鐵男、「月島の労働事情」を山名義鶴、であった(その復刻版は、1970年、生活古典叢書第6巻『月島調査』<解説・関谷耕一>として光生館より発行された)。「月島調査」は、すでに多くの指摘があるように、労働者の密集した都市地域社会を対象にして、労働者の社会生活と経済生活についてはじめての総合的調査であり、その人口動態、衛生状態、労働条件から社会の階級構成にわたる総合的立体的社会調査(Social Survey)として、まさに先駆的、画期的な成果であった。大島清は調査の概要と方法を次のように的確に要約している。

「月島は隅田川の川口にある三角州で、つくだ煮と監獄で名高い佃島、それに埋め立て地の新佃島と月島からなる人口約3万の一地域。ここは石川島造船所はじめ第一次大戦中の軍需景気の波に乗って族生した大小の機械工場が軒を接し、その周辺は熟練工の密集地帯であった。江戸の名残をのこす古びた民家や漁家のたたずまい、労働を終えた職工が一杯ひっかける屋台のおでん屋、風呂屋と米屋と寄席のある町の一角に、高野は調査所を設置した。この根拠地に彼の有能な調査員として山名義鶴、権田保之助および星野鐵男が寝泊まりし、町内の住民と毎日あいさつを交わしながら調査をすすめた。」¹⁴⁾

仕事はまず社会地図の作製と既存の統計資料の収集と分析から始まった。大島清は、星野を「東大出の医学士で南原繁の義兄、のちに金澤医大の教授となり社会教育にも尽力した篤学の士」と紹介し、また「星野は幼稚園と小学校に通って3000名をこえる児童の身体検査を実施した。上水道・下水道から糞尿処理やゴミの排出量まで衛生環境

をくまなく調べ、また住民の疾病や死因統計を作成した。権田は労働者の娯楽はもちろん、彼らの結婚と離婚、家計のやりくりから子供と駄菓子屋の関係まで社会生活のディテールを異常な熱心さをもって洗い上げた。山名は主として機械工場における労働時間や労賃などを調査した。」¹⁵⁾と述べている。

「月島調査」の特徴は、社会地図の作成もそのひとつだが、さらに「官庁の既存資料と実地調査から得た材料をもとに各種の統計を作成し、その統計分析によって一地域内にある住民の生活状態と社会階級構成を明らかにした点に最大の長所がある」¹⁶⁾といわれる。

労働者の悲惨な衛生状態

星野も実際、実地調査と並行して、月島における過去の衛生状態の一端を明らかにするために、明治42年より大正7年に至る10年間の死亡原因も丹念に調査し、その統計分析を進めている。また、一般衛生状態については、上・下水道、ゴミの年月別排出量、排便状況、街路や衛生組合を調べ、さらに、月島の小学児童身体検査(検査を受けた児童総数は三千をこえているが、退学者が多いので有効検査票は2,759)をその家庭での養育史を含めて実態調査した。さらに、労働者の身体検査は成年工と少年工にわけて調べ、労働者家族の栄養状況調査をその献立表やカロリー計算など実に綿密な事例研究を蓄積している。

星野がとりわけ注目しているのは、労働者の劣悪な住居環境である。長屋の構造や衛生状態については、下水の排泄状態、通路の状態、換気や採光の状態など詳細に実地検査し、特に不良長屋に関しては次のように記述していて留意される。

「屋根は黒色ブリキ葺であって、室内暗く(或るものは全く光を仰ぐこと出来ぬものがある)空気は悪臭を放ち、共同便所は開放せられしまゝにして食事中でも臭気鼻をつき、下水亦停滞して狭く屈曲してある通路を汚して児童等の遊戯する所ない程である。」

14) 大島清「月島調査——都市地域社会調査の一典型」『岩波講座・現代都市政策月報9』1973年8月、2ページ。(後、大島清『人に志あり』岩波書店、1974年に所収。)

15) 同上論文、2ページ。

16) 同上。

「月島通りに面せる十戸の如き複雑なる構造であって、床下なく地上に葎を敷きて茲に起居するものあり、光線全く入り来らぬ所に住するものあり、三畳に六人の密度を以て暗黒裡に起臥するものあり、便所は眼前に横はり開放せられて悪臭食膳を襲ふという有様下水の排除は不良であって氾濫又氾濫。共用水道栓は二個を三十一戸にして使用してゐるのである。かかる長屋に人は住んでよいのであろうか、住ましておいてよいものであろうかと思はざるを得ぬやうな感を與ふるものである。野原の鳥獸の方が遙かに気持よい住家を有つてゐるのではあるまいか。」¹⁷⁾

こうした悲惨な月島の長屋の実態を前にして、星野の憤りとも何とも言い難い思いが強く迫ってくる文章である。また、「衛生職業」の種類やその「社会衛生地図」を丹念に調査、作成し、たとえば、駄菓子屋一店当たりの児童数や理髪店、湯屋（銭湯）、ミルクホールの実態調査も実施している。星野のこれらの業績について、大島清は次のように書いた。

「星野は小学校や幼稚園に通って子供の身体検査をおこなった。そのあと、150名をこえる労働者の身体調査も実施した。労働者15家族から毎日の食事献立を集めて栄養調査をするのも彼の仕事であった。医者、あんま、洗濯屋、駄菓子屋、ミ

ルク・ホール、古着屋など、衛生関係の職業調査をやった結果は、さらに数葉の社会地図となって残された（1920年6月終了）。」¹⁸⁾

星野にとっても、この「月島調査」で採用された社会衛生学や社会科学の方法論は、彼のその後の学問研究の総合的な出発点ともなったといえ、また、そこで直視した労働者の生活環境の劣悪な状況、とりわけ、「かかる長屋に人は住んでよいのであろうか」と思わせるほどの鳥獸にも劣る住生活の悲惨さの現実、それらにどう対処し、どのような改善の道があるのかが、彼の研究の大きな課題のひとつとなった。

4. 留学中の「田園都市」への実地調査

欧米への留学

1922（大正11）年春より1924（大正13）年5月まで、星野鐵男は文部省派遣により衛生学研究のため、アメリカ合衆国および欧州（主にドイツ、英国）に留学した。その間、星野は内村鑑三や親族、友人、知人らに筆豆に手紙を出しており、たとえば、内村鑑三の『日記』1922年7月25日（火）には次のように記されている。

「<前略>予防医学研究のための欧米遊学中の星野医学士、ニューヨーク発の通信の一節にいわ

17) 星野鐵男「月島に於ける労働者の衛生状態」復刻版、203ページ、および206ページ。

18) 大島清『高野岩三郎伝』岩波書店、1968年、103ページ。なお、大島は、星野と高野岩三郎との関係について次のように記述している。

『『古人今人』の編集発行者・生方敏郎氏からいただいた便りによれば、高野岩三郎の提唱によって実施された月島調査——1918年、わが国で最初の組織的な社会調査、家計調査——に衛生部門を担当した星野鐵男は氏の親戚のひとりであった。星野一族には有名な直樹、茂樹、芳樹の三兄弟があり、(引用者注・三兄弟は鐵男の従兄弟)星野鐵男もその一族であった。彼が月島調査に参加した経緯やその後の動静など、ほとんどわからなかったのであるが、伝記の刊行を機縁にそれが判明した。

星野は東大医学部を出た医学士で、在学中から内村鑑三門下の敬虔なクリスチャンであった。彼の姉（引用者注・これは誤りで、妹）は南原繁氏にとつぎ——若くして亡くなったというが——そうだとすれば南原氏の師である小野塚喜平次が親友の高野岩三郎に星野を紹介したのではないかと想像される。月島調査で彼は労働者街におかれた事務所に泊まり込み、島の衛生環境から小学生の身体調査にいたるまで、実に献身的に働いた。この仕事の後、一時ドイツに留学、1924年に金沢医大教授になり、31年大阪で死んだ。医大在職中、彼はしばしば校門を出て北陸地方の民衆の中にはいり、衛生思想や性科学の啓蒙教育に努力したという。

これらのことを、生方氏および星野の遺子・命氏の教示によって知ることのできたのは僕の大きな喜びであった。青年時代、高野とともに労働者調査に当り、その後、死に至るまで民衆教育活動を忘れなかったという事実——高野の理想と情熱がそこにも生かされているように思われたからである。」大島清『人に志あり』岩波書店、1974年、134～135ページ。

星野鐵男の「月島調査」以降の様々な研究活動や実践に、大島清のいう高野岩三郎との共同研究での経験の影響があったとする見方もあり得ようが、むしろ、前掲の『星野鐵男』所収の多くの証言や星野達雄の諸著作に示されているように、星野鐵男のすべての研究および実践は、元来彼自身のキリスト者としての信仰とその伝道に発していると思われよう、と思われる。

く、『…このごろは、日本の貴いところ、使命とするところがよくわかるようになりました。桑港で会ったストージ博士が、<米国人は決して靈的でも宗教的でもありませんよ。日本人の方がまさっています>と申されたのは、日本びいきの同氏の言だからとは言えません』と」。¹⁹⁾

また、前掲の『星野鐵男』に収められている平山清宛の手紙には、次のように書いた。

「1922・11・5・ベルリンより平山清氏宛<前略>伯林ニ来テモウ三ヶ月過ギマシタ。日本ヲ出テカラ八ヶ月ヲ経マシタ。兄ノ御手紙『早くお帰りになるといいと思います』トアリマシタ。私モ早ク親シイ方々ノトコロニ帰リタイ気ガシテ来マシタ。日本ニアル日ニ色々ノ幻想シヤウナコトハアリマセン。アメリカ。大陸。ト見マシテモ大シタ発見ハ出来マセン。物質ニ於イテハ日本モコチラモ変リマセン。靈ニライテハ日本ハ旧世界ヨリモ一層純真デアルヤウニ思ハレマス。『東洋ノ深ミ』と云フコトヲ此頃ハ考ヘ思ハサレマス。」

パリ、ベルギー、オランダに泊まったが、大したこと「有リマセンデシタ」と書き、「ライン河沿岸ニ三泊シマシタ。戦争ノ結果ハマダノコッテキマシタ。ヨイコトハアリマセン」²⁰⁾とも書いている。そして、1923年3月22日付、ベルリンよりの平山清宛手紙には、留学1年後の感想を次のように述べている。

「<前略>ヨイコトモナク賢クモナラズニスゴシマシタ。獲物ト云ヘバ西洋文明ノ案外ツマラヌモノダト云フコトヲ知ツタコトデス。ソシテ微力ナガラ靈本意ノ文明（と云フ言葉ハアタラヌノデスガ）ヲ建テヤウト云フ氣持ガシテ来タコトデス。今ノ欧州ハ宗教ニ於テモ教育ニ於イテ政治ニツイテ行詰ッテルヤウデス。暗タンタルモノデス。光ガ何処カラ来ルデセウ。誰モイ、アテルモノハアリマセン。<後略>」²¹⁾

田園都市の起源

こうした在外研究のなかでは、イギリスを訪問し、世界最初の田園都市レッチワースをつぶさに

調査したことは、衛生学研究の上からもかなり新鮮な印象をもった旅だったようである。1924年5月に帰国して、金沢医科大学初代衛生学教授に任ぜられ、早速、その6月に「田園都市の発達」と題する帰朝講演を行っており、その内容は『金沢医科大学十全会雑誌』（大正13年）に掲載された。

まず、19世紀末に始まった田園都市は、今やその青年期に達したばかりだが、次にその起源と発達について概略を述べたい、と次のように書き出している。

「英国における産業革命の結果は農村の衰退、都市の膨張を来し都市は拡大するに従ってその労働者区域の非衛生的状態を現出した。日光充分なる農村、清風薫る村落より都市の労働機会と歓楽を求めて煤煙と濃霧に閉せられた大都市に一度入込みたる田園の民は二度とその故郷には帰るべくも非ず、文明の奇現象なる貧民窟に永住するの悲しむべき運命に陥いたのである。」²²⁾

すなわち、農村を捨てて大都市への集中が進み、ついには非衛生的生活の地域が現出するに至り、ここで初めて、たとえば、貧者の救済を目的として計画された社会思想家・ロバート・オーエンの新労働村建設（1799年、ニュー・ラナークという紡績工場の労働者のためのコミュニティ）などをきっかけに、以後、各種の労働者の生活環境改善のための都市新設案が次々と現れたのである。そして、1898年10月エベネザー・ハワード（Ebenezer Howard, 1850～1920）による『明日（Tomorrow）』の出版は、近代田園都市運動の起源を画するもので、彼のいう田園の自然と都市の利便、健康設備をあわせもつ田園都市の実現がいつそう熱望された。

エベネザー・ハワードは模範都市の具体案を次のように示していると星野は説いている。

「鉄道に近き外郭は工業地帯、中央は大公園にしてその中心に市役所、公会堂、劇場、図書館、博物館、病院等の公共建築物あり、その周囲に住宅あり、更にその外圍に学校教会等を有する大公園通ありて運動場もその中にある。更に進んで新

19) 山本泰次郎編『内村鑑三日記書簡全集』第2巻、1964年、204ページ。

20) 前掲『星野鐵男』221～222ページ。

21) 同上、223～224ページ。

22) 星野鐵男「田園都市の発達」『金沢医科大学十全会雑誌』大正13年、111ページ。

都市建設に関する経済方面すなわち如何なる方法を以て土地を購う乎之が資金の償還法は如何、市政の実際、農業の経営法、社会事業等に関し事実と可能性に根拠する方法とを挙げて之を詳論したのである。』²³⁾

当時、タイムスをはじめ世評は、それらをユートピアンの夢とその実現の可能性を否定したが、ハワードは、構想実現の手段として田園都市協会(Garden City Association) および第一田園都市会社を設立にこぎつけ、1903年4月には、ロンドンよりケンブリッジに至るハートフォードの一地に新設地を選定、ここに第一田園都市レッチワースが誕生した。星野はこの間の田園都市発展過程を実に詳細に分析し紹介しているが、この的確な記述は、戦後イギリスでも定評の高い、W. アッシュワース『イギリス田園都市の社会史—近代都市計画の誕生』²⁴⁾に照らしてみても裏付けられる見事さである。

レッチワースでE. ハワードと出会う

星野がレッチワースを訪問、実地調査したのは1923(大正12)年で、当時の人口12,000、戸数3138、内商家120、工場89、公共建物33でなお工事中であり、駅前広場からの大道路も建設中だったという。「工場は盛んに活動していた。学童は喜戯して都市にみるが如き栄養不良児を見なかった。一工場を参観したがその明るきこと水晶殿の如く、その清潔なること、その設備の親切なることに感嘆したのであった。汽車にてハワード氏は恰も余の隣席にありて余がレッチワース訪問の目的あることを察し親切に説明して処々に紹介して呉れたことは感謝するところである。』²⁵⁾

おそらく星野の脳裏には「月島調査」で実査した労働者の住生活の悲惨さが余りに対照的に思い起こされたことであろう。また田園都市運動の創設者、エベネザー・ハワードと偶然とはいえ、直接面識を得、親切に説明を受け処々に紹介された日本人は、たぶん数えるほどしかいないにちがいない。

まさに貴重な体験であり、日本における田園都市論にとっても特筆に値する出来事である。星野は、さらに第二の田園都市ウェルウィンも訪問しており、「目下戸数700、人口2500なるもその計画様式はレッチワースに勝るものがあるようである」²⁶⁾と述べているが、田園都市で最も着目したのはそこでの人々の健康状態である。

「田園都市を建設すべき土地が選定されるれば先ず道路を設け上水を供給し下水道を敷設し健康なる住宅を建て善良なる牛乳供給所を設け良肉を市場に供せしめ運動遊戯の設備を遺憾なくすのである。』²⁷⁾

このような田園都市の健康状態は他地域と比べ良好のはずである。たとえば、1912年におけるレッチワースと英国全体との死亡率の比較をみると、人口千人につき8.0:13.0となっており、乳児の死亡率の比較ではさらに大きな差異となる。たとえば1921年の出産千人につき、レッチワース54.8に対し、ロンドン81.0となっている。年度はちがうが、対照として、東京、大阪、金沢における1916年の死亡率および乳児死亡率は以下のとおりである、とその対比を示している。

1916年	死亡率	乳児死亡率
東京	17.97	213.7
大阪	17.94	221.3
金沢	19.47	205.3

星野鐵男は、そのほか英国各地の田園都市とその他の都市との一般死亡率および乳児死亡率を比較して、田園都市のそれが非常に低いことを実証しており、英国と比べ日本のそれが高すぎる点も指摘している。まさに、健康の問題を考慮してゆく上で、田園都市の発達途上における衛生状態は今後めざすべき方向を辿りつつあることを示しており、「されば田園都市の出現とその将来における発達如何は社会の健康如何と大なる関係を有するものと見るを得べく、医学者、衛生学者の又大

23) 同上、114ページ

24) William Ashworth, *The Genesis of Modern British Town Planning*, London, 1954. 下總薫監訳、お茶の水書房、1987年。

25) 前掲、星野「田園都市の発達」115ページ。

26) 同上、115ページ。

27) 同上、115ページ。

いに注意すべきこと」²⁸⁾と結論している。

4. 住環境研究の展開

『住宅問題』の分担執筆

留学中、田園都市の発達に強い印象を受けて帰国した星野鐵男は、以後、研究や伝道のほか北陸各地での講演や出版活動を精力的に展開している。たとえば、1925（大正14）年には恩師横手千代之助の在職25周年記念出版に当り、横手社会衛生叢書第四冊『住宅問題』を分担執筆し、また、その年金沢市内に自ら設計、監督に当たった住宅を新築し、ここを終生の住居とした。この『住宅問題』はその後の星野の住環境論の原型ともみなしうる考えが総合的に述べられており、住宅問題への基本的視点が全て提出されていて注目される。

まずはじめに、住宅問題を取り扱うためには、社会政策としての側面や都市計画問題や田園都市運動等についても当然ふれたいのだが（住宅衛生学上の問題もすでに横手らの専門書が著わされているのでそれらを除外して）、ここでは一般論的に、一日本人、一市民として住宅の衛生ということを考えてみたい、としている。我々の住んでいる家は従来どおりで果して健康にさしつかえないのか、生活の上からみて改良の余地はないのか、将来の日本の住宅はどういう形をとるべきか、その設備、その活用はどうすべきか等々についての検討である。²⁹⁾

まず、他の動物と比べ「人類とは知能と手とを用いて家を建ててそこに生活する動物」と人類を定義する。今日とりわけ人間活動は、家が生活の中心要素となり、しかも人間が集合し大都市化が現出することで、新たな健康障害という大問題に直面している。一方、人間は肉体の健康は勿論、精神の健康をも増進するような生活環境を必要としており、現在の人間社会生活に最も適した保健衛生上の条件を備えた家を造ることが大切となってくる。この健康を保ちまた増進し、生活を高め深めるに必要な条件、設備および努力とは何かが、次に問題になる、とする。

家を造り住むためには、敷地の選択が重要だが、これは要約すれば、日当たり良く、粗大顆粒地質の、東南向き斜面が良好である。また、空気の新澄、周囲の閑静の土地、かつ都市生活の利便が条件となる。ただし、これらの諸条件をすべて満たすことは、今日の都市生活で不可能に近いとすれば、その人の生活にとって最重要条件のみをえらぶしかない。

また、将来の日本住宅は在来式にせよ洋式にせよ、殊に成長期にある幼少青年の健康上より見て椅子式を奨めたい。休息のための寝室は2階に独立すべき必要があり、階下は昼間の活動に向けて能率よく設備され利用されるよう設計すべきであろう。寝室が2階に移れば階下は居間なり食堂なり活動社交等の目的にのみ利用しうる、という。次に、健康と生活の能率化の点から台所と便所の改良が必須である。共に清潔第一を心掛け、台所には食料貯蔵室の付置を、さらに汚水汚物の処理方法の合理化を先決とすべきである。あるいは階段の改良、踊場の工夫、戸襖の改良、窓の配置による光と通風の確保など家の温室法、採光法および換気法などきめ細かく論じている。

家は、その内に住む人々と共に変化し成長してゆくべきもので、住む者を一步一步高め深めるよう工夫をこらす必要がある。ことに成長期にある児童にとって、家は絶えずその成長を助長し健康を増進するよう理想を以て工夫考案さるべきである、と考える。健康の増進とは、肉体と精神との両者のそれであり、家はこの両者の健康を増進し維持する生活環境である点を強調している。また、できたら児童の自然愛、心身の発育を助けるものとして庭園がほしいし、空地があれば、野菜、果樹、花卉などを植えて、土地の生産力を十分に発揮させたい。「日本ハ土地狭ク人口多キ故、土地ノ利用トイフ事ハ人々ノ頭ニ強ク浸ミ込マネバナラヌ事デアリマス」³⁰⁾と提案している。

星野のこの住宅環境論は、安部磯雄の「家庭経営」の原則という説と共有されていることが興味深い。すなわち、安部磯雄によれば、家庭の幸福の第一条件が健康ということにあるとすれば、ま

28) 同上、118ページ。

29) 星野鐵男『住宅問題』横手社会衛生叢書第四冊、金原商店、1925年、1～3ページ参照。以下、本書より引用。

30) 同上、56ページ。

ず住宅の選択を第一とし、食物の質に注意することを第二とし、衣服のことはこれを第三に置かねばならぬ、と指摘し、つまりは、衣食住の順序を転倒して「住食衣」の順序に改めることが家庭経営の神髄でなくてはならぬ、と主張している。そして、家屋を建築するには三つの要件があり、第一は衛生、第二は便利、第三は修飾であるという。³¹⁾

この「住食衣」の思想は、小林一三にも引きつがれており、³²⁾これは、星野、安部、小林の思想に共通するキーワードともいえる。

「衛生文化思想普及」のパンフレット刊行

1926年3月には、婦朝報告のひとつとして、『東西の衣食住』（内容は「住食衣」についての講演で、翌年「衛生文化思想普及会」パンフレット第13輯、1927年とし刊行）が刊行された。東西といっても、東は日本の関東、東北、北陸に限定し、西は英米独仏の大都市を中心とする範囲とみて話を進めている。その中では、住における形や色の差異にふれたのち、住における東西の差異を、外観の差異、住の構造、設備（たとえば便所の臭気）、生活様式における差異について詳しく検討している。そして、子孫に富を残すということは、実は「子孫のために独立自治生活をするに足る健康と知識と高潔なる品性を遺産として与えることが最も大切」と指摘し、「子孫の健康の 위해서는 栄養ある食物を与え、健康なる家に住わせ、身体の鍛錬を計りて幼少の頃より健康の増進に注意せねばなりません。＜中略＞高潔なる品性を陶冶するには、深い正しい信仰を確立さして倫理的批判の出来る自律の人とすることです。之に勝る親の遺産はないと私は信じて居ります」³³⁾と述べている。

星野も、安部磯雄、小林一三と同様に、従来は・衣・食・住と申してきましたが、「肝要なるものより順に並ぶるとすれば、住食衣と全く倒になすべきであります」といい、健康の点からみれば、

衣は寒暑に応じて適当に用いられるべきもの、食は栄養障害をおこさぬ程度に採らるべきもの、住については「個人は勿論社会としても大なる注意を払って、社会の健康を害せぬよう、善をのこして悪を改むべきであります。」³⁴⁾と述べている。

1927（昭和2）年2月には、『性教育に就いて』を出版し、（たちまち三版を重ね）、これはわが国における衛生学的立場からの性教育研究の先駆的業績として注目された。また、個人で衛生文化思想普及の目的でパンフレットの刊行を企て、その第一輯として『保健衛生の根本問題』を発行した。その冒頭で次のようにいう。

「我が国の健康状況は欧米の一等国に比べて尚劣っているところがあります。ことに北陸の状態は日本の中でも一番劣っているということは、その死亡率が日本一なので解ります。之は決して名誉なことではありません。それで私はどうにかして日本一高い死亡率の北陸を日本一健康な地方にしたいと常に考えているのであります。」³⁵⁾

まず、稲作の実際を例として、それらはやがて私共各自の健康を保つ際の心配、努力、注意と共通しており、ひいては、結婚や離婚問題、生活環境を整調する諸問題、国民の食糧、栄養、人口の問題、病気予防、治療制度の問題、人間慾望の問題等は衛生学において取り扱う興味深い研究テーマである、と述べている。健康を保つためには稲の一生におけるが如く、私共の一生において起こり来る出来事の範囲を予め知り置くことが必要という。その知識の殿堂に至るには三つの門、すなわち、目門、耳門、口門とがあり、口門とは口を以て自分の考えを話すということである。そして「考える」という点で大事なことは、第一に「自ら考えよ」ということであり、第二に「正しく考えよ」、第三には「広く考えよ」ということである。

人が考える、正しく広く考えるということは、私人としてまた公人として社会全体の健康を増進するために頭を用いる、今までのような用い方で

31) 安部磯雄『理想の人』金尾文淵堂、1906年、82～94ページ参照。

32) 津金澤聰廣『宝塚戦略——小林一三の生活文化論』講談社、1991年、148ページ参照。

33) 星野鐵男『東西の衣食住』（衛生文化パンフレット第13輯、衛生文化思想普及会、1929、28～29ページ参照）。

34) 同上、29～30ページ。

35) 星野鐵男「保健衛生の根本問題」『公衆衛生』第8号（に再録）、1927年7月、2ページ。

なくて因襲から離れて自分の頭を改造することが第一の急務であり、それが保健衛生上の根本問題である、という。さらに「親切に考えた所を実行する」ということがまた非常に大切なのだ、と次のようにも述べている。

「私は常に申します。『何に対しても親切であれ』と、何に対してもであります。自分に親切な人には勿論であります。自分に無頓着な人に対しても親切であれ、自分に不親切なものにも親切であれと常に家のものにも教室のものにも申しているのであります。』³⁶⁾

健康に必要なことで「清潔」にまさるものはなく、清潔第一は健康の秘訣であり、身体各部の清潔ばかりでなく、家の内外、町内を清潔にすること、下水の掃除、塵芥の始末、その他町内至る所、隅から隅まで清潔にすることは健康上第一になすべきことである、とする。そしてこれを徹底せしめるには各人が先ず、その精神の清潔法をなすべきであり、保健衛生の根本問題は「親切に正しく考える、愛を以て考えた所を実行する」という所にある。「一人がこの考になると一家は面目を新めます。一村が之を実行すると一郡はその旧態を一新します。一郡が之を断行すれば一県は輝やき出します。一県が範を垂れば国全体が動きます。』³⁷⁾かくして国の健康状態は一音階高い調子ものになります。星野は常にこう考え「小範囲乍ら之を実行」していると述べ、これが健康増進の根を養うことであり、「此の根からして幹も出て、葉も繁り、花も咲くのであります」³⁸⁾と訴えている。

5. 『清潔の徹底』から『環境の浄化』へ

「清潔法」の徹底とは

さきにふれた『保健衛生の根本問題』につづい

て、1927年には『清潔の徹底』『環境の浄化』『正しき生き方』という3部作を『衛生文化パンフレット2～4輯として発刊している。³⁹⁾

その第一篇『清潔の徹底』は、主に身体の清潔法について述べたものだが、なかでも食物、飲料水、空気の清潔についての指摘は、単に身体内部の清潔にとどまらず、第二篇の環境の清潔を扱った環境論と深く関連している。第二篇『環境の浄化』では、健康と環境との密接な社会的関係に注目し、文化的存在としての人間にふさわしい健康とは何かについて多角的に論究している。

まず、環境には、目に見える周囲の意と、目には見えないが感ずることのできる環境（精神的環境）とがあり、主として前者をとりあげるとして、浄化の意味から説きあかしている。浄化とは、たとえば飲料に適せぬ水がある方法で飲むことのできる清い水にすることであり、汚い空気がある方法を加えて健康的なものにすることだ、という。⁴⁰⁾ また、衛生学は、我々が生活する自然的環境と同時に社会的環境を、健康との相互関係において研究し、また健康増進のための方策を研究する科学と定義した。つまり、星野は常に「健康な住心地のよい、明るい社会」の実現を願っているのだが、その現実認識には厳しいものがある。

「日本の社会を見ますと、混沌としているのではないですか。子供の時から、のびのびと成長することの難しい社会ではないですか。人が多くて仕事が少ない社会ではないですか。表面的な礼儀はあっても、内心からの親切の少ない社会ではないですか。結核やらチフスやら、肺炎やら消化器病やら、願わしからぬ病気の非常に多い、不安な社会ではないですか。働いても働いても、収入の増える事も少ない、悲しい社会ではないですか。私は思うと憂うつに閉ざされるのです。』⁴¹⁾しかし、勇気を出して改善と創造に取り組もうと問う

36) 同上、16ページ。

37) 同上、17ページ。

38) 同上、

39) この3部作は、好評に応じて合本の形で『清潔の徹底』衛生文化思想普及会、として1930年に単行本が再版発行されている。「衛生文化思想普及会」は、星野鐵男を代表として、金沢医科大学衛生学教室内に設置され、教室員や金沢在住の医師等を中心に組織されていた。同会は星野の主唱によって活動の目的は主に北陸地域における衛生知識・思想の普及にあった。自費刊行された「衛生文化パンフレット」は、星野の存命中に第24輯まで刊行されたという。ただし、そのうち、未だ現物が確認できぬ輯もある。

40) 星野鐵男『清潔の徹底』（前掲書）、59～60ページ。

41) 同上、75ページ。

のだが、当時の社会を星野がどう見ていたかを知る上で、貴重な文章である。

次に、生活環境としての都市と田園について考察を進め、今や若者は田園を見かぎって、都へ都へと走ってゆき、ある村の如きは若い娘達が皆都へ行って仕舞って、お嫁さんが欲しくっても、来るものさえないといわれている。「私はアメリカやドイツやフランスの村の人たちの生活を思って、日本の村の人達の生活を思うと悲しくなります。田園は美わしかるべくして、醜くなっています。健康なるべくして、不健康になっています。」⁴²⁾しかしそれでも田園には日光があり、きれいな空気も水も緑の空地や新鮮な野菜もあり、眠りを妨げるものはない。健康の点から見れば田園は都市に勝り、「村は人をつくり育てます。都は人を消費し殺します。しかし日本の田園が、イギリスやデンマークの田園のように、健康でないことを知らねばなりません。」⁴³⁾と指摘している。

そうした実態を踏まえた上で、しかし都市の空気も下水も浄化される必要がある。浄化とは健康に適せぬ状態を、健康に適する状態に整えることであり、都市の病院、学校、工場、市場、停車場、官庁、百貨店等は、ことごとく浄化作用を必要としている、とみる。そうした環境としての都市の浄化の根本策は、その「田園化」であり、都市に田園を多分に取り入れることである。

「世には大都市を以て誇る愚かな者があります。かかる愚か者によって環境は汚されて来るのであります。広大な田園味を欠ける都市は、近世産業の産み出した一つの社会的悪であります。」⁴⁴⁾東京にしろ大阪にしろ、今のままに放置し、その拡大に任せる時は、ニューヨーク、ロンドンに勝る悪都市となることは明らかだと警鐘を鳴らしている。そして人口10万以上の大都市が、将来健全なる発展をなすためには、少なくとも30年、50年の先を予想して、その田園化を計らねばならない。田園化するにはどうするか。たとえば、家と家との間に空地を設け、街路をもっと広くし

空地には緑樹を植え、大都市を無数の小都市にわけけるのも一案である。都市にはもっと十分な光ときれいな空気と水とが必要である。家の間取りもゆとりのある大きな部屋にして光をたっぷりと入れる。子供は自然の懐において教育すべきものであるから、広々とした運動場が欲しい。病人にとって最も良い薬は、自然と親かな静かな看護だから、病院は緑の樹木に包まれた、散歩道のある環境に建築され、経営されねばならないはずだ、とその理想を述べている。⁴⁵⁾こうしたユートピア思想は今や空想に近い感もあるが、同時に今なお新鮮な切実さをも訴えていよう。

価値創造の生活

星野鐵男は人間の生活文化の理想像ないし人間らしさについて、私たちは、健康にさえ暮らせればそれでよいというのではなく、健康はそれを基にして、さらに進んだ人間らしい生活をなすための用意として獲得さるべきものとしている。結論的に次のように述べている。「人間らしい生活といえ、それは価値を創造する生活であろうと思います。健康はもとより一つの価値であると思いますが、他の真とか善とか、美とか聖とかいう、色々の価値を創造して行くところに、人間に固有な創造的生活があるのであります。学問・道徳・芸術・宗教等の、価値を創造する諸活動をなすところに、私達は生きる意義をもっているのであります。」⁴⁶⁾つまり、「人間的、人格的な、価値創造の生活に進むべきである、知的生活を徹底さすべきである、真理に忠なる、善事を行うことを楽しみとする、美に対して敏感なる、敬虔なる生き方をなすべきである、而してこれがために、健康をその溢るる状態にまで、個人に於いても、社会に於いても、楽しむことが出来るように衛生文化を進ましむべきである。」⁴⁷⁾とする。

星野鐵男のいう「衛生文化」とは、人間的な価値創造の生活を担う基盤そのものであり、それが彼の生活文化論の出発点でもあった。

42) 同上、84～84ページ参照。

43) 同上、86ページ。

44) 同上、92ページ。小林一三も、ほぼ同様の観点から「森林公園式」都会案を提唱している。(拙著『宝塚戦略』〈前掲〉168～170ページ。)

45) 同上、93～96ページ参照。

46) 同上、186ページ。

47) 同上、187ページ。

1928年も「衛生文化パンフレット」の発行と福音伝道のことは寸時も怠ることなく、たとえば、『家の話』、『顔の話』、『窓の話』とユニークな考察を次々と発表している。たとえば、「都市の窓」の提唱など星野ならではの洞察力の一例であろう。すなわち、窓というものが家に、光と空気を入れるものだとすれば、都市にも清い空気とよりよい光とを入れる部分が必要で、それが「都市の窓」であり、「公園」がそれにあたる。「ロンドンの中央にハイパークがあるように、ベルリンの中央にティーヤガルテンがあるように、都市の中央に思いきって大きな公園のあるということが、窓としての役目を果たすには適している」⁴⁸⁾という。

窓のない家は家ということができぬように、公園や広場のない都市は今や本当の都市とはいえないのである。窓のない、公園＝自然のない都市に住んで困るのは、やはり成長期にある子供と老人と回復期にある病人だという。さらに「皮膚としての窓」の機能もある。谷崎潤一郎の『金色の死』という小説では、金箔を全身にはりつけて死んだ人のことが書いてあるが、これは皮ふの作用を妨げたからであり、この皮ふの作用の役割が家の周壁と窓なのだ。つまり、窓がもつ衛生的目的の第一は、日光を家や都市に導き入れることであり、私たちが日光から受けるものは、明るさと温かさとその不思議さである。⁴⁹⁾こうした「窓のある都市」への呼びかけも、遠い昔の出来事なのではなく、今日、私たち自身の都市の生活文化が直面している課題であることもまちがいない。

1929年にはさらに『健康増進に必要な知識』を

衛生文化パンフレット第14輯として発行、翌年には『愛児のために何を為すか』を、1931年4月には『養教育の神髄』を衛生文化パンフレット第21～22輯として発行、その12月に病床で執筆したという『性教育の実際』を出版した後、12月20日に還らぬ人となった。⁵⁰⁾これらの著作についての総合的検討は他日を期すほかないが、たとえば、『養教育の神髄』において、星野は、家庭においてなすべき養育と教育とを問題とし、まず「自分は養教育者である」という父としての養教育者たる強い自覚が必要だという。「育て難い子をもった親の心は曇り勝ちである。困って仕舞う。泣いても足りない。あきらめきれないという場合が少なくない。子供の人格が完成するまで、独立自活の一人前となるまで、親は骨折る。心労する、悩む。然しこれが人生の姿である。私は養教育の根本精神をここに置く」と述べた。さらに、「育てて育てられる。教えて教えられる。この根本的なものを理解し、把握して、養教育に従事すべきである」⁵¹⁾と鋭く指摘している。そして人間形成の理想を次のように説く。「一方に於いては人の世話にはならぬという独立の精神、それでいて、人のためには出来るだけの奉仕をしようという精神、この精神を子どもにに入れてやりたいのである。この二大精神を養教育の目標にすることはどうであろう。私は漠然と抽象的に理想を掲げるのでなしに、日々の生活に於いて、独立自治の心を培い、社会との接触に於いて、奉仕の精神を養って行くことを、人格教育の目標として、毫も誤らぬと思っている。」⁵²⁾

この理想的人間像は奇しくも関西学院における

48) 星野鐵男『窓の話』(衛生文化パンフレット第12輯) 衛生文化思想普及会、1928年、22ページ。

49) 同上、20～26ページ参照。

50) 絶筆ともいべき『性教育の実際』をはじめとする星野鐵男の性教育論と住宅衛生論との関連および『愛児のために何を為すか』についての評価をめぐっては、川合隆男「愛児のために何を為すか・星野鐵男」生活研究同人会編『近代日本の生活研究——庶民生活を刻みとめた人々——』光生館、1982年、に詳しい。

また『健康増進に必要な知識』(衛生文化パンフレット第14輯、衛生文化思想普及会、1929年)が、大阪毎日新聞社と東京日日新聞社が御大典記念事業として、全国に健康増進運動を展開し、いわばそのメディア・イベントの一環として、大阪毎日新聞社金沢支局が主催した健康増進講演会での講演(それを補足追加した講演記録)である点に、メディア・イベント史研究に取り組んでいる筆者としては強い関心をもった。

51) 星野鐵男『養教育の神髄』(衛生パンフレット第21～22輯) 衛生文化思想普及会、1931年、9ページ。

52) 同上、17ページ。なお、星野の家庭教育、社会教育としての養教育論については、独立して論ずべき重要な今日的課題であることを指摘して他日を期したい。また、星野による衛生学の専門的諸論文には、たとえば「性問題の社会衛生的考察」『中外医事新報』1927年、「脚気死亡率分布図ニ就テ」『十全会雑誌』1928年6月、「性問題の一断面」『金沢犯罪学会雑誌』第一巻第2・3・4号、金沢犯罪学会、1928年12月、「絶対安静ニ就テ」『結核』第八巻第二号、1930年5月、などをはじめ学会発表論文等があるが、本稿では筆者の専門外のため対象から除いてある。

Mastery for Service のモットーと合致する。

瀧沢利行は、「星野の社会衛生思想の基本は、人間の健康は自然環境および社会的環境に規定されながら、その生活の総体が、親から子へ、子から子へと継承されている状態であるととらえられる点にある。したがって、彼における社会衛生の実践の本質は、次世代へいかに生活の安定と向上の思想と文化を伝えるかという点に集約されるものであった。星野が『社会衛生学』よりも『衛生文化』を好んで用いた理由も、衛生活動の創造的側面、相互形成的側面を強調しようとする意図によるものと理解することが出来る」⁵³⁾と述べている。

瀧澤は、さらに「近代日本の社会衛生学に『自治』精神を内在化させ、星野鐵男の實踐に見られるような衛生活動が大眾の自己形成機能や文化形成機能を内包する視点を導いたと考えられる」⁵⁴⁾と評価している。

星野鐵男の生涯を友人の高谷道男は次のように凝縮して綴っている。最後にこれを引用させていただき、本稿の結びとしたい。

「星野君は武蔵野に於て聖書の真理を内村先生より学び、白雨会によりて信仰の友誼をむすび、みその夫人によって平和な家庭を作られた。実に武蔵野は彼にとって春風かほるガリラヤの春であった。しかしながら彼の使命は北海の天地にあった。寒き波荒き日本海にのぞむ国が星野君の最後の地であった。而してそこに彼は我等の及ばざる多くの意義ある仕事を完うした。青年時代より生前の標語とした『医術を以てする基督教の伝道』をば、仏教の中心地に於てこれをなした。しかしながら星野君はこの尊き使命を身に負う十字架の体験に於て完うしたのである。其十字架の第一は夫人の永眠であった。其の第二は病弱の彼が

研究と伝道の多忙なる体を以て子どもの養育一切を他人の手をからずしてなしとげたという事である。それはしかし彼の健康を害した一つの原因ではなかったと私には思われる。其第三は実に彼の病弱と其の死であった。星野君が家庭的に重荷を負うて行くにつれて彼の人格は輝き其感化は多くの人々に及んだのではあるまいか。彼の最後は、実に若き多くの友をふるいたたせたであろう。」⁵⁵⁾

以上

付記：本稿における星野鐵男に関する諸文献・資料については、東京大学附属総合図書館、東京大学医学部図書館、石川県立図書館、金沢大学医学部図書室、等にお世話になった。また、星野達雄氏、角田勤氏並びに、星野鐵男先生のご子息・星野命氏には、それぞれ貴重なご教示を賜わった。記して改めて深く感謝したい。

53) 瀧沢利行「近代日本における社会衛生学の展開とその特質」『日本医史学雑誌』第40巻第2号、日本医史学会、1995年（平成6）年6月、19ページ。この論文の「四、近代日本社会衛生思想の『自治』概念」の中の第2項「社会衛生学における『自治』理念の実践化——星野鐵男の例——」として、星野の学問と実践とが考察されている。

54) 同上、20ページ。

55) 高谷道男「白雨会と星野君」前掲『星野鐵男』72ページ。なお、同書所収の坂田祐「星野君と白雨会」では次のように書いている。「命君の出生後間もなく愛妻みそのさんを天に送りました。その後の星野君の活動は外に内に実に目ざましいものでありました。大学教授として、衛生学の権威として、その英名は北陸の天地は勿論、日本全国に響き渡るに至りました。家庭にあっては、お父さんとお母さんの二人の役目に全力を盡したのであります。お父さんの役目もお母さんの役目も未だ果たさない中に頑是なき三人の子供をあとに遺して昨年の歳の暮、勿焉として天に還ったのであります。」同上、25ページ。

〈付表・参考資料〉小林一三、権田保之助、星野鐵男の主要著作一覧（1890～1943）

小林 一三、1873（明治6）年1月3日～1957（昭和32）年1月25日
 権田保之助、1887（明治20）年5月～1951（昭和26）年1月
 星野 鐵男、1890（明治23）年2月10日～1931（昭和6）年12月20日

年	小林 一三	権田保之助	星野 鐵男
1890 (M.23)	小説「練絲痕」		
1914 (T.3)		『活動写真の原理及应用』	
1917 (T.6)	『歌劇十曲』		
1921 (T.10)		「月島と其の労働者生活」 （『月島調査』所収） 『民衆娯楽問題』	「月島に於ける労働者の衛生状態」 （『月島調査』所収）
1922 (T.11)		『民衆娯楽の基調』	
1923 (T.12)	増補『日本歌劇概論』	『娯楽業者の群』	
1924 (T.13)		「社会生活に於ける娯楽の一考察」	「田園都市の発達」
1925 (T.14)			『住宅問題』
1926 (T.15)	『続・歌劇十曲』	「『浅草』の味」	『東西の衣食住に就て』
1927 (S.2)		「『隣のラジオ』は社会問題ではない」	『性教育に就て』 『保健衛生の根本問題』
1928 (S.3)		「映画検閲の問題」 「活動写真法の制定へ」	『家の話』『顔の話』 『窓の話』 「脚気死亡率の研究」発表
1929 (S.4)			「死亡診断書に記入されたる乳児死亡時の病名に於て」 『健康増進に必要な知識』
1930 (S.5)		「娯楽地『浅草』の研究」	『愛児のために何を為すか』
1931 (S.6)		『民衆娯楽論』	『養教育の真髓』 『性教育の実際』
1932 (S.7)	『雅俗山莊漫筆』（一）		
1933 (S.8)	『奈良のはたごや』	「労働者娯楽論（一）」	
1935 (S.10)	『私の生き方』	「学生娯楽問題」	
1936 (S.11)	『私の見たソビエト・ロシヤ』 『次に来るもの』	「慰安放送の都会性と地方性」	
1938 (S.13)	『戦後はどうなる』		
1939 (S.14)	『事変はどう片づくか』	「学生娯楽問題に関する調査」	
1940 (S.15)	『蘭印より帰りて』	「新しき農村生活と娯楽」 （『関西学院新聞』7月）	
1941 (S.16)	『蘭印を斯くみたり』	『国民娯楽の問題』	
1942 (S.17)	『芝居ざんげ』		
1943 (S.18)		『娯楽教育の研究』	

（戦後は省略）

Better Living Conditions Advocated by Tetsuo Hoshino

ABSTRACT

One of the pioneering medical environmentalists, Tetsuo Hoshino (1890–1931) grappled with environmental health issues as early as 80 years ago. After graduating from the Medical Department of Tokyo Imperial University, he was engaged as one of the specialists in a full-fledged survey of living conditions of workers at Tsukishima in Tokyo, between 1918 and 1920 the first of its kind in Japan. (The social survey was later called the Tsukishima Survey of the Sanitary Bureau of the Home Office.)

He was among the team members who made a detailed study of the sanitary conditions of labourers working at Tsukishima, which marked the starting point of his scholarly research. Later he studied in Europe and America for two years starting in 1922. Upon returning to Japan, he was made the first professor of hygiene at Kanazawa School of Medicine (now the Medical Department of Kanazawa University). From then on, the rest of his brief life was devoted to the improvement of living conditions centring on health problems in the Hokuriku region and to awareness raising activities by putting his scholarly knowledge into practice.

So far Hoshino has been highlighted mainly as a pioneer of sex education, but my paper has tried to spotlight a hitherto little known aspect of his scholarly study on living conditions and health with regards to environments.

Key words: environmental health, Tetsuo Hoshino, living conditions